

イメージメディアの美しさを支える 基盤技術

小特集編集にあたって

編集チームリーダー 堀田裕弘

イメージメディアの使命は、空間的・時間的に限られたフレーム（画枠）で、本物をいかに本物らしく提示するかである。そのため、イメージメディアに関連する撮像・通信・放送・蓄積・表示・印刷・生成などの技術の使命は、この制限を克服して、いかに本物らしく提示するかであり、これに関連する多くの産業では、本物らしく提示するための技術開発を行っているし、また、本物よりもよりよく見えるように改良していることが多い。

では、人は、イメージメディアの良し悪し（本物らしさ）を、どのように判断しているのであろうか。2枚の画像（映像）を並べて同時に提示し品質（劣化）評価した場合と、1枚の画像のみを提示して品質評価した場合、多くの人は前者の方が比較的答えやすいと思う。前者は、脳内で2枚の何らかの違いなどを比較・評価していると考えられるが、1枚だけ提示する場合は、何らかのリファレンス（参照）画像を脳内に思い描いて、勝手にそれと実際に提示されているものと比較しているのではないだろうか？私の研究室では、このようなリファレンスを「脳内リファレンス」と最近呼んでいる。

イメージメディアに関連する産業では、デジカメ・フラットパネルディスプレイ（FPD）・プリンタなど様々な新製品が開発販売されているが、開発サイドでは販売する製品の最終パラメータ決定などは、脳内リファレンスの肥えた人が必ず判断を下している。同じ条件下でパラメータ選択を行ったとしても、企業間では異なることが想定され、これがその企業のカラー・特色となっている。このように、脳内リファレンスの肥えた人が多く在籍する企業は、他の企業と一線を隔てた高品質な製品開発ができています。このことより、消費者は、ブランドや

低価格を求めるだけでなく、製品の品質にも着目し、高品質な製品開発を志向している企業を支持すべきではないか。

そこで、この脳内リファレンスが肥えて、その品質に対する意見を製品開発に反映できる人を、私は、「画質杜氏（Image Quality Brewer）」と称したい。元来、日本酒の醸造方法とその管理方法は世界でも類を見ないほど複雑にして、巧妙であり、この技術を継承してきたのが杜氏である。杜氏とは、すべての酒造技術面のエキスパートであるばかりでなく、統率力、判断力、管理能力に秀でた人格者、ジェネラリストであることが要求され、卓越した技、統率者の資質、自然に学ぶ英智をもって、生涯現役を貫く稀有な仕事である。これに習うと、画質杜氏とは、撮像・通信・放送・蓄積・表示・印刷・生成に関するイメージメディアクウォリティ全般に対して幅広い識見を有し、画質の良し悪しを判断できるだけでなく、好ましい画質を生成・加工する技術を有する人である。よって、画質杜氏とは、すべての画質評価・生成における技術面のエキスパートであるばかりでなく、統率力、判断力、管理能力に秀でた人格者、ジェネラリストであることが要求される。

このような技術者の育成は、そんなにたやすいことではないが、近年の工学と芸術の融合の機運を、このイメージメディアの世界に展開していけば必ずや実現可能となり、諸外国に対して我が国がイメージメディア産業のイニシアチブを維持することにもなる。今回の小特集が、このような技術者育成と技術発展の動機付けになれば幸いです。

最後に、大変御多忙にもかかわらず原稿の執筆を快諾して頂いた執筆者の皆様、編集に御尽力頂いた前編集特別幹事の荒川薫先生や小特集編集チームの皆様、並びに会誌編集担当の学会事務局の皆様へ深く感謝させていただきます。

編集チームメンバー 堀田裕弘 趙 晋輝 大田恭士